

## グローバル化のなかの語学教育（その4） —道徳教育との関連—

### Study of Globalization and Language Education IV — The Case of an English Language Class at the Elementary School Attached to Nara Women's University: Relation to Moral Education —

キャンベル 久美子  
CAMPBELL Kumiko

グローバル社会の進展と共に、国際的に活躍できるグローバル人材の育成と、それに伴っての外国語教育の重要性の認識も広く一般に浸透してきている。そのような趨勢にあって、真に大切な外国語を学ぶ意味が置き去りにされ、能力、スキルとしての外国語がただ物という時代<sup>注1)</sup>の到来が危惧される。現在、高等教育レベルでの英語力の先鋭化、大学の国際化が着実に進められている<sup>注2)</sup>。

子どもの成長と発達、学習者が外国語ということばを学ぶ中心にある語学教育の方法を見失わないためにも、実際の子どもたちが、活動のなかで一つの学びを意味づけ、それまでの全体の理解のなかに関連づける過程、あるいは、ひとつの言葉で意味されているものを、交差し合う他の言葉から際立たせるなど、たえず言語感覚を研ぎすますことによって、着実にことばの世界<sup>1)</sup>を明確にしていける学びを構築する。本稿ではそのような意図をもって小学校における外国語活動の実践を振り返りたい。

キーワード：ことばの教育、外国語活動、道徳教育、カント、全人教育、生き方の問題  
Key Words : Language Education, Foreign Language Activities, Moral and Human Education, Kant, Holistic Education, Way of Life

#### 1. はじめに

学校教育とは人間の能力を分析的に捉えるだけでなく、統合の目を投入して教育を企画することが目指される。ことばをかえれば、子どもなりの生き方の態度というものを形成することがねらいとなる。

語学教育との関わりでいえば、一方において子どもの心身が自然的漸次的に成長、発達し、他方、ことばが介在する生活世界の中で子どもは教育されるものである。道徳教育との関連でいえば、ただ単に語学ができる、話せるという一面的な問題ではなく、より深い全人的教育の問題として考えていくことが必要である。

現在、道徳教育の内実化は喫緊の課題とされる。しかしともすれば規律すなわち道徳という安易で狭い捉まえに陥る。形だけ育てばよいのではなく、道徳において大切なのは、自らのところあるいは思考を育てるということである。そこから入り人間的に成熟していつているかが問題なのである。教育の本質を原点に立ち戻り、道徳性の育ちを見ることの意義は大きい。近代的な道徳の一つの範型であるカントの道徳論、また本質的に道徳教育の意味をもつ彼の教育論を記した『教育学』<sup>2)</sup>を基底に据え小学校外国語活動の実践を通しての考察を試みる。

#### 2. カントの道徳論

カントは『教育学』論説の冒頭において、「教育学ないし教育論は、自然的か実践的かのどちらかである。自然的教育とは、人間にも動物にも共通の教育、換言すれば保育である。実践的ないし道徳的教育とは、自由に行為する存在者のような生き方ができるよう人間を陶冶するところの教育である。それは、人格性への教育、つまり、自立し、社会の一員となり、しかも自

己自身内的価値をもちうるどころの、自由に行為する存在者の教育である」<sup>2)</sup>と記述している。彼の有名な「人間は教育されなければならない唯一の被造物である」<sup>2)</sup>という言葉は、人間が社会的存在であり、教育の可能性をもって生を受けたことを表しうる。そして、「人間的自然素質を調和的に発展させ、その萌芽から人間性を展開させる」<sup>2)</sup>こととする彼は『宗教論』<sup>3)</sup>において、人間の素質を3つに分けている。

- 1 「生物としての人間の動物性の素質」
- 2 「生物であると同時に理性的な存在者としての人間性の素質」
- 3 「理性的であると同時に引責能力のある存在者としての人格性の素質」

このようにカントが捉えた人間の素質を考慮して、構造的ともいえる全体性に即した教育を考えていかなければならない。

### 3. 小学校外国語活動と道徳

現行の小学校学習指導要領外国語活動における目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」<sup>4)</sup>と示している。

また外国語活動学習指導要領解説にも外国語活動の目標は、以下の3つの柱から成り立つと示されている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的表現に慣れ親しませる。

これら3つの柱を踏まえた言語活動を統合的に体験することによって、中・高等学校における外国語学習に繋がる「コミュニケーション能力の素地」<sup>4)</sup>を養うことが目指されており、コミュニケーションという自らを表現することがその前提として求められている。

次に学校における道徳教育の目標は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づいて制定されている。道徳教育の目標が教育全体の目標に通底しているものであることは明示され、道徳固有の目標として、「その基盤としての道徳性を養うこと」<sup>5)</sup>が規定されている。

さらに道徳教育の「第1章 総則」の「第1 教育課程の編成の一般方針」で、「道徳の時間はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない」<sup>5)</sup>と規定されている。このことはつまり、外国語活動には子どもの発達段階が集約的に現れるという特質を持つがゆえに最も適切な指導が可能であるといいうる。子どもの発達段階に即し道徳性の育ちの過程に適う教材の選択も正に子どもの発達全体に大きく関わってくる。

翻って子どもが生活する学校という場は、人間を育てるところである。そうである以上、あらゆる教科において、道徳性に繋がる子どもなりの生き方の態度や心構えを身につけることになる。子どもは、語学(外国語活動)を通して、体験的に感性が豊かになり、こころが育つ。そして文化である言語を通して「ものの見方、考え方」を培い、人間として成長し、さらなる人間的成熟へと向かうと考えられる。

本稿では実践としての外国語活動を手掛かりに、外国語活動と道徳教育という2つの個別のものをつき合わせて捉えるのではなく融和的に捉えて考察した。

### 4. 外国語活動の実践場面から

筆者は現在、奈良女子大学附属小学校(以下、附属小学校)において、「国際」という枠で第2学年から第6学年までの外国語活動を担当している(第4学年は中等学校英語教員が担当)。

最初に触れる外国のことばや文化として、絵本のもつ意味は大きいと考える。そこでま

ず、絵本教材を道徳の内容項目における4つの視点に照らしてみるが、文科省の取り上げについて若干先に触れておきたい。

現行の文部科学省共通教材『Hi, friends!2』における物語(絵本)の活用は、第6学年の「Lesson7 We are good friends.」がある。これは国内外のよく知られた物語を素材として見開き誌面に16の隠された物語の絵の典型を探し出すというもので、例えば「シンデレラ」では、片方の舞踏靴の絵と共に音声資料には「What time is it? Oh, it's twelve midnight.」と表現されている。他に「赤ずきん」、「おおきなかぶ」等の部分音声資料がデジタル教材に集録されている。次の授業展開は児童に馴染みのある日本の昔話「桃太郎」で、『Hi, friends!2 指導編』にねらいとして、「①物語を英語で聞いて(その)物語の世界を楽しむこと、②英語のリズムに親しませること」<sup>6)</sup>とある。絵物語はおじいさんとおばあさんの挨拶文「See you.」「See you later.」に始まり、「That's OK.」「We are good friends.」で終わるという形である。筆者が担当している授業でも児童は意外に易しい英語文でストーリーができて驚いたり、平易な英語で再話できることに楽しさを見いだしていた。またこの物語の一連の英語対話文を難なく読める児童もおり、よい刺激を生んでいた。この様子からも最初に触れる外国語のことばや文化として絵本教材がもつ意味は大きいと考える。

次に現在活用している、あるいはその予定にある主な絵本教材を、道徳的視点から捉えることとする。

#### 4-1 教材と4つの視点

現行の小・中学校学習指導要領「道徳」の道徳教育の目標を達成するために指導すべき内容項目は、主として、「自分自身に関すること」、「他の人とのかかわり」、「自然や崇高なものとのかかわり」、「集団や社会とのかかわり」、という4つの視点から成っている<sup>5)</sup>。筆者が教材として活用している外国語絵本の主要なものを、この視点すなわち、道徳性の発達もしくはこころの育ちの過程につながる構造に分類すれば、(表1)のようになる。

感性的文化そのものである絵本の活用はまず読み聞かせから入る。つまり音による文化の違いの自然な体現から始まる。絵本のことばは、音そのものとしての音声言語としての美しさを持ち、「詩」となれば機能さえ有す。視覚的であると同時に聴覚的であり、部分的であると同時に全体的であるという質の異なる感受が受け手に自然に成立する。またストーリーの展開を追うという思考は予測する想像力と、期待を常に準備させる活動となる。学年が上がり論理的思考が進むに従い曖昧性を嫌う傾向も生じてくるため、題材選択や活用の方法に配慮を要する。

学年段階別の取り上げの視点は、子どもの社会的な意識の広がりにはぼ沿う形を取る。①の自分自身にかかわることから始め、②③他者および自然とのかかわりに広げ、最後に④の集団や社会へと進める。これは主要な流れであるが、一つの直線的な方向性ではなく複数にまたがる場合等もあり、また始めの自分自身つまり自己へ戻る循環でもある。内容的な観点からは順次難易度は上がっていく。例えば高学年で取りあげる『The Happy Prince (幸福な王子)』はアイルランドの著名な作家オスカー・ワイルドの作品で、物語でありながら詩的要素を多分にもつもので、日本でも翻訳され広く読まれている。授業では作品の

表1 4つの視点による絵本の分類<sup>注3)</sup>

①	自分自身に関すること	「A color of his own (じぶんだけのいろ)」 「Rosie's walk (ロージーのおさんぽ)」 「The giving tree (おおきな木)」
②	他の人とのかかわりについて	「Frog and toad are friends (ふたりはともだち)」 「The mitten : a Ukrainian folktale (てぶくろ)」 「Papa, please get the moon for me. (パパ、お月さまとって!)」
③	自然や崇高なものとのかかわりについて	「The very hungry caterpillar (はらべこあむし)」 「The fall of Freddie the leaf (葉っぱのフレディ)」
④	集団や社会とのかかわりについて	「Swimmy (スイミー)」 「Wabi Sabi (わびさび)」 「The happy prince (幸福な王子)」

冒頭パラグラフを取りあげている。外国語表現であり文化の表象としての絵本を通して外国語に触れることで、子どもの生き生きとした活動と発想が生まれ<sup>7)</sup>豊かな感性へと繋がる。

学習活動に自由度が生かされれば、子どもはますます想像力を広げ、喜々として活動に打ち込む。2年生の1クラスでの絵本教材『Rosie's Walk (ロージーのおさんぽ)』<sup>8)</sup>の1例をあげる。

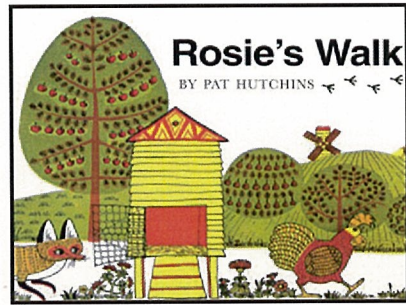


図1 Rosie's Walk<sup>8)</sup>表紙

このお話は、シンプルかつ快活なリズムを持つ音(文)とストーリーの展開で、ユーモラスなイラストは子どもの気持ちを捉え、子どもたちは自由にイメージをひろげていく。雌鳥やキツネに寄り添い、気分は主人公たちである。

そこでの8人グループの発表を紹介する。このグループは自分のファイルの台紙を抜き出して自分の発表場面をそれぞれが描くことから始まった。

発表の具体は、発表者一人ひとりが担当場面ごとにページをめくりながらストーリーを伝える形式を基本に、流れの後半では発表者が尋ねる質問形式もあり、単方向コミュニケーションから双方向コミュニケーションへの方法の転換も含まれていた。『へいのすきまをするり』のエイゴは何と書くでしょう?と尋ねると、聞き手からは「through the fence」と大きな声が返ってくる。結末も本来の結末に続けて「ロージーはいま、どこをおさんぽしているでしょう?」という投げかけで結ばれて余韻を残す。時間的制約の中での活動で少し荒さは残るものの、作品発表する児童の表情は当然ながら楽しげでかつ互いに向けた優しさがあった。少し大きめの8人で纏まりある活動ができたという感覚と自信は大きい。

絵本を使って学ぶことは、音声感覚と視覚感覚に最も自然的に働きかけるダイナミズムをもつ身体的心身経験である。また4つの視点の流れは、自分自身から始まり集団へ、そしてまた自分自身に戻るのであるが、このような構造的過程において、さまざまな素材を通して道徳性につながる認識の深さ、知情意全体が豊かに育っている。

#### 4-2 コミュニケーションの種別(双方向的と単方向的)

筆者が授業において留意している点は以下のようなことである。やり取りの例を低学年、中学年、高学年に分けて紹介する。

**低学年:** あいさつ(自然に従っての保育から始まり自然的教育は範囲が広い<sup>注4)</sup>、また意識して挨拶するという意志が関わってくる意味で実践的教育でもある)、礼儀あるいはしつけとして言語環境を整え「生活に密着した言葉」を身につけることから始めて、イメージと形象、連関への意識を持たせる。特に低学年では学んでいる自分自身に対する自己肯定感や自信を養い、かつそこに意志を育むことが重要であると考える。

**中学年:** まず形式として、授業の開始や終わりの定型表現をこれまでの日本語から“Let's start our English class.”“Yes, let's.”“That's all for today”等に換えて、無理のない自然な形で外国語活動の枠に入る。自分についての情報や事実を伝えることから、気持ちや感情を伝える表現へと幅を広げる方法で、コミュニケーションの相手である他者を、意識の中により明確に介在させる。

**高学年:** 指導者の表現、指示の他、相手を褒める、励ますなども入ってくる。限定的であれ、できるという実感を蓄える。年齢が上がるにしたがって外国語(ことば)を客観的に捉える方法をより広げ、一方では、ことばを丸ごと受けとめ、返す。常に思考のレベルに応じた動的ダイナミズムをスパイラルに体験的に経験させるようにする。

## 5. 思考の深まり

これまで論じたことを改めて思考の深まりとして捉えると、ことばの意味とは、文字通

り以上の意味をもち人間の全体的表現である。つまり、そこにはことばの意味だけではなく知的思考の根があるのである。

思考レベルの段階に応じて、単に語彙を覚えること、あるいは知ることそれ自体の喜びを起点に、最も生活に身近な身の回りの語彙から始めて、自然や生き物への関心やそれらとの生活の結びつきの強い時期において、できるだけ多くの語彙に触れさせる。つまり論理的思考力の根底を支えるところの語彙を保障していく。というのも、その中であって意識的か無意識的に関わらず、既にもつカタカナ語との関係的理解や言語の持つ固有の音声的な異なりと共に、感情・意図の表現を示すパラ言語的理解<sup>注5)</sup>、身振りや表現に表れる異なりに対する感得と理解は、ことばを通して触れる文化、あるいは文化そのものであることばは、自ずと理解の深さを深化させる。

これらを言語が担う多様な情報とすれば、ことばが他者との双方向的交流であり、コミュニケーションの手段であるという意味では、教室活動においてことばの大枠を知的に捉えると同時に、人と人が触れあうことを通して何かを感じる感性的捉えがそこに在る。第2言語習得の初期の段階で自己文化への理解と文化の違いを感じ取られることは、全人表現の出発点、その片鱗とみなされよう。

中学年である3年生では、自己をグループの一員として意識化できる社会性の発達が一方にあり、同時に学年が上がるに従って、概念的思考および抽象的思考が発達する。これまでの全体として感覚的に掴むことよりも分析的あるいは弁別的にことを理解しようとする傾向をもつ段階である。また短いダイアログで達成感を楽しめる。

ことの整理、分類的に捉えることを考えれば、小学校段階においても文法用語としてではなく何らかの形でもしくは数量的に限定しての使用も可能であろう。理解の助けとしてことを秩序化し、単純化して把握できるような手立てとして、例えば文法を用いて分析的に説明することも効果的になりうるであろう。

## 6. モジュール形式の帯授業<sup>9)</sup>の例示並びに自律的学習<sup>注6)</sup>

第5学年の1クラスでは、全学年で行う「元気調べ」を英語で行っている。

「国際係」が一人ひとり「How are you?」と英語で尋ねる「元気調べ」をモジュール形式の試みとして行っている。初回は皆「I'm fine.」等で次々に応えられていく。次の2回目の授業ではより自分の気持ちに沿った、あるいは素直に自分の心身状態をそのまま表した表現が出てくる。「I'm hungry and sleepy.」等々である。外国語である英語を使って自分のありのままを表した表情は明るく快活で少し興奮ぎみにも見えた。さらに次の3回目はかなり落ち着いた雰囲気の中である種淡々と返事が返されていく。この流れは形式的活動になったとも取れようがそれでもなお、その後の授業展開は時間的な連なりをもって English 空間環境が形成されていた。

何故なら外国語活動の入り口で無理なく自己の心身状態を英語で考え、その気持ちや様子を英語で表現する身体全体と心についての自然な内省(反省的思考)が行われているからであり、一人ひとりの主観的捉えであるが故の「意識との連鎖」となり、ことばと自己との距離がなくなっている。自然な内省が提供できる教材は重要である。

学年が上がるにつれて他律から自律へ移行する。第6学年では、学習方法として附属小学校の特色である自律学習<sup>注7)</sup>の形態をより多く取り込む方法で授業を進めている。近年、文科省の英語教育改革等を背景に小学校における外国語学習に対する認識が浸透してきており、このことは児童の学習意欲を牽引し、また環境的にも外国語との心理的距離が縮まっている。

高学年になると現実に英語で表現できることと、自分が伝えたい内容とのレベル差は意識にのぼる。その中で「国際係」は、領域・教科の区切りを超えた学習の集積の実りを反映させて、外国語活動および教科的授業の展開を教師と共に考える。教材『Hi, Friend! 2』と教師の用意した資料および「国際係」が自主的に用意した準備物を活用する。授業始め



の内容確認を通して進行は主に係が進める。例えば9月の初回授業では、「国際係」の提示する国旗を見て順番に英語で答える練習場面で、Greece（ギリシャ）を日本語の転移でグリーシャと発音してしまう。教師が言い直しに介入した訳だがそれは教師対1児童という対峙的2者関係ではなく「国際係」を媒介に3者関係の中での言い直し行為である。発表者の心理的負担は軽減され受け止めに余裕も生まれる。国際係が重要な役割にあり、児童が自分と他者を関係性の深まりの中で考えられる。また同時に仲介者である係の役割を理解していることでもある。その日は係の積極的役割遂行を支援する形でその仕事ぶりと挨拶他を含む授業進行マナーに教師である筆者が大きく感動したことを伝えてその日の授業を閉じた。

実践校の外国語活動も自律学習の形態を大切にしながら進めている。積極的関与の姿勢があり、きりっとした最高学年らしい雰囲気と協働的に授業を盛り立て作り上げてようとする制作的一体感がある。授業の展開に児童自身も参画しているためその責任も共有して、自律と責任の関係がある。教師自身も協働的製作活動を体感し、次への期待が自ずと膨らむ。授業では教師の気持ちや感動を常に言語化している。その気持ちの表現はまさに分かりやすい「I'm happy.」「I'm very happy.」であるが、これは実際の生活環境でも頻繁に使われることばになっている。

7. 教師と生徒の関係あるいは2者関係

7-1 無理のない流れで繋ぐ：自然的教育の考え方の基本に従う

2年生の朝の会で、アメリカのカリフォルニアへ転校して現地校に通うクラスメートからの自由研究と手紙の返事が話題になっていたところへ1限目の授業で入室する。朝の会の余韻がまだ感じられ格好の素材が目に入ってくる。

図2, 3は、転出生から送られてきた自由研究と地理学習ノート（Daily Geography Practice）と、クラスの皆からもらった手紙の返事である。

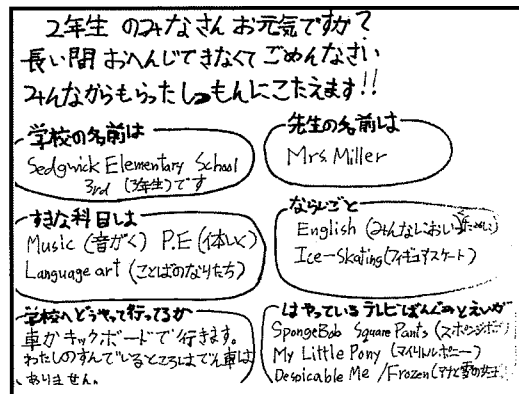


図2 手紙

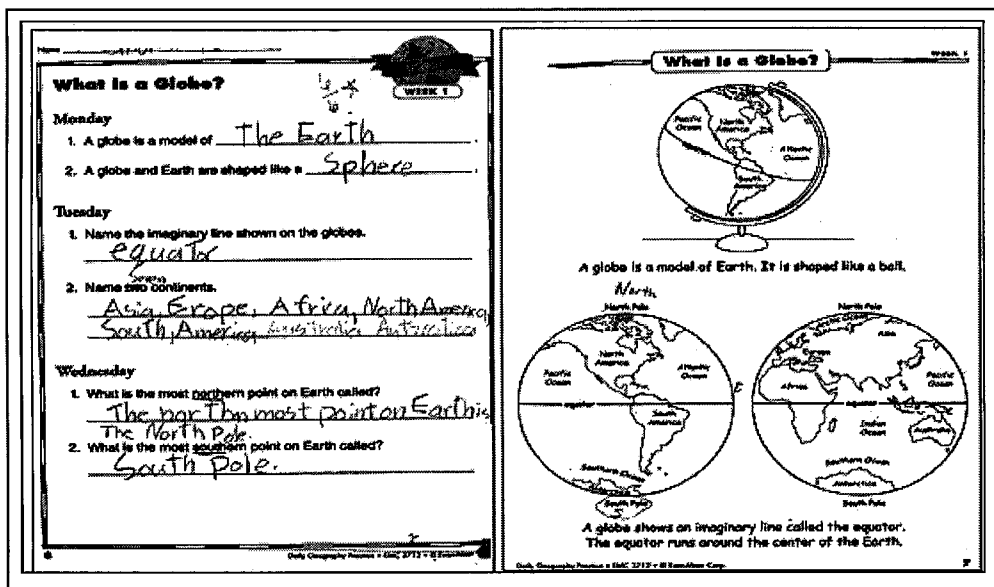


図3 地理学習ノート

まずはじめ、地理ノートより「What is a Globe?」をキーセンテンスとして取り出し、その日の学習テーマにする。副線は「A globe is a model of the Earth.」である。授業ではこの2文を基本に進める。語彙は earth の「th」と、地理的関連の方角を示す north, south, east, west の4語を含めて示す。日本語にない子音「th」の発音確認後は、声に出して試みる。

当然ながら授業は日本語と英語の両方で進める。質問文「What's this?」は頻りに聞き合いなどで使ってきているのでそのまま「What's a Globe?」と問いかける。返事は日本語だが、「宇宙から地球を見たときのかたちです」と返ってくる。それはそのまま、「A globe is a model of the Earth.」に難なく繋がっていく。普段から意識化している「塊」として a model of Earth を声に出しながら早口言葉の感覚で言えることを楽しむ。これは同時に日本語音にない音素、無声歯摩擦音の体験でもある。教え込みすぎないことに配慮した上で、聴覚、調音の柔軟なこの時期の「音」への感覚を鍛えることは大切である。自由研究のテーマは「世界の地図について」(日本が地図の中心でないことの発見)であった。国のイメージを既に持つことの意味は大きい。

### 7-2 コミュニケーションの壁

社会的関係のなかで、コミュニケーションの方法や手立てを、外国語活動を通して既にある日本語環境では実現が難しいところの壁を超える。例えば身振りやジェスチャー、顔の表情などが含まれる準言語の使用を知ってそれを行う。文化の差異の身体表現でもあるボディランゲージをも含めて理解することによって自然に文化の多様性を体験している。

ことばを介して、あるいはことばを通すことによって相互理解や自己理解が深まり、ことばと同時にボディランゲージを含み、生涯に亘って感性に関わってくる。

教材『Hi, Friends!』, 「Lesson 2 I'm happy.」では、「Good luck. (がんばってね)」, 「Come here. (こっちへ来て)」, 「I don't know. (わかりません)」, 「Good. (いいね)」, の4つのジェスチャーが提示されて、単元目標は、①表情やジェスチャーをつけて相手に感情や様子を積極的に伝えようとする、②感情や様子を表したり尋ねたりする表現に慣れ親しむ、③表情やジェスチャーなどのことばによらないコミュニケーションの大切さや世界には様々なジェスチャーがあることに気づく、と設定されている。挨拶表現「How are you?」に応えて「I'm hungry.」も含めて「I'm happy. I'm sleepy. I'm fine.」4文で応える。実際の生活で挨拶に「I'm hungry」と応えるかを別にすれば、教室活動としては実際の児童の身心状態と直接的に関与し、生活場面で身近に使えるような感覚もあって覚えは早い。また初期の段階で提示する別れる時の挨拶表現「See you.」は心地よい響きをもち、発声しやすい挨拶文で学校の中で頻りに聞かれる人間関係をつなぐ社交のことばとなり、言語間の垣根のない自分のことばになっている。カントに戻れば、この人間関係を繋ぐ、あるいはその関係性を紡ぐ「人間知」の形成は、「伶俐への陶冶により、人間を公民にまで陶冶され、公共的価値を獲得する。その際彼は、公民的社会を意のままにしたり、またこれに順応したりすることを学ぶのである。最後に人間は道徳的陶冶により、全人類に関する価値を獲得する」<sup>2)</sup>と述べている。子どもは外国語を通して、新たな理解やコミュニケーションの方法を経験し、自己の内実を豊かにしていく。

## 8. まとめにかえて

語学を通して思考を育てることがまずもっての主眼である。思考のなかに人間的な価値の意識を培う。その方法として教材の選択は重要である。カントがしばしば触れているように人類的見地<sup>10)</sup>に立つこともできようし、ことばの中でそしてことばを通して、語学的感性を磨き、文化の違いまでを自然に会得する。このような観点において外国語活動の特質はまさに道徳教育にふさわしい活動といえるのではないか。

現在、小学校の外国語活動は教科化の方向である。同様に道徳の教科化の方向性も打ち出される。それは教科書と評価を意味する<sup>注8, 11)</sup>。一定の基準に基づいて評価が行われる訳であるが<sup>注9)</sup>、何を基準にどう評価するのかということだけではなく、特に道徳では教師自

身の道徳性について不問にできないなど、根本における倫理を問えばなお難しい。子どもに何を育てるか、という核心の問題がそこにある。実践の過程においては、全人的な育ちを培うことを意図し、以上、自然的教育と実践的教育の道徳をその基底で生かすべく行う。小学校外国語活動の多様な関係性の中で培う語学の芽が、意味ある生の道程に繋がる環境世界であろうと捉えている。

本稿は第66回関西教育学会口頭発表をもとに加除修正したものである。

## 注釈

注1) 岡本夏木は「ことばと人間形成」<sup>1)</sup>の中で、ことばを個人と社会をつなぐものとして、その発達段階から一次的言語と二次言語について述べている。現代社会情勢としての二次言語への過度の期待は、単なる二次言語の形式だけが肥大した人間を生む、と警告する。コミュニケーションの素地を養うものとして、一次言語、二次言語を母語と外国語という関係に置き換えても同様の形式だけが肥大化していくといえよう。

注2) 大学の世界展開力強化事業は、国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育グローバル展開力の強化を目指すもので、文部科学省は平成23年からグローバル大学を重点的に支援する「スーパーグローバル大学創生支援」プロジェクトを開始している。

注3) レオ・レオニは小学校2年の国語教科書(光村図書)上巻で『スイミー』及びフレデリック等の作品紹介がある、下巻にはアーノルド・ローベルの『ふたりはともだち』の「お手紙」。国語で既習等であるため、児童は親近感をもって教材に関わってくる。

<表中の絵本教材>

Leo Lionni : 『The Color of His Own (じぶんだけのいろ)』, Dragon Books (1997)

Pat Hutchins : 『Rosie's Walk (ロージーのおさんぽ)』, Simon & Schuster (1975)

Arnold Lobel : 『Frog and Toad Are Friends (ふたりはともだち)』, Harper Collins (1970)

illustrated by Evgenii M. Rachev ; English text by Susan Matsui 『The Mitten : a Ukrainian folktale (てぶくろ)』, Labo teaching information center (1997)

Eric Carl : 『Papa, Please Get the Moon for Me (パパ、お月さまとって!)』, Simon & Schuster Books for Young Readers (1991)

Eric Carl : 『The Very Hungry Caterpillar (はらぺこあおむし)』, Hamish Hamilton (1969)

Shel Silverstein : 『The Giving Tree (おおきな木)』, Harper & Row (1964)

シェル・シルヴァスタイン ; 本田錦一郎訳 : 『おおきな木』, 篠崎書林 (1976)

シェル・シルヴァスタイン ; 村上春樹訳 : 『おおきな木』, あすなろ書房 (2010)

Leo Buscaglia : 『the Fall of Freddie the Leaf : A Story of Life for All Ages (葉っぱのフレディ : いのちの旅)』, Henry Holt (1982)

Leo Lionni : 『Swimmy (スイミー) (Knopf Children's Paperbacks)』, Dragonfly Books (1973)

Oscar Wilde : 『THE HAPPY PRINCE AND OTHER STORIES (幸福な王子ほか)』, Puffin Books (1962)

ワイルド原作 ; いもとようこ文絵 : 『しあわせの王子』, 金の星社 (2007)

Mark Reibstein ; art by Ed Young 『Wabi Sabi (わびさび)』, Little, Brown (2008)

注4) カントにとって、教育は自然的教育か、実践的教育かの二つから成り立つ。「自然的教育とは、人間にも動物にも共通な教育、換言すれば保育」から始まり、その内容は「養護、訓練、教化、文明化」という表現で記されているが、素質でいうところの「動物性を人間性に変える」ことから始まる<sup>2)</sup>。そして自然的教育から実践的教育へと展開されていくことは「前者は後者の可能的根拠を養うべきもの」<sup>12)</sup>つまり自然的教育が十分なされてはじめて実践的教育がある。「実践的ないし道徳的教育」とは、他律的であったところの自然的教育から自律的な教育として、意志の働きが重要な意味を持って関与する実践的教育により人間性への教育、そして人格性への教育が展開される。



注 5) パラ言語とは、文字によって伝達されない言語に伴う音声的特質、イントネーション・リズム・ポーズ・音質などをいう。工学的観点からであるがパラ言語的情報の区分、定義の明確化は藤崎博也<sup>13)</sup>に詳しい。ドナ・エリクソンは「国際的観点から見たく声」とパラ言語情報(心的態度)の表現<sup>14)</sup>で異文化間のコミュニケーションにおけるパラ言語情報の意味を実証的に示す。この分野の成果の蓄積は大きい。

注 6) 文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育会実施計画」<sup>15)</sup>掲載の「小学校5・6年生におけるモジュール授業を用いた時間割の例(イメージ)」

	月	火	水	木	金
モジュール	※	※	※	※	※
1校時	○	○	○	○	○
2校時	○	○	○	○	○
3校時	○	○	○	○	○
4校時	○	○	○	○	○外国語(英語)
	給食・昼休み	給食・昼休み	給食・昼休み	給食・昼休み	給食・昼休み
モジュール	※外国語(英語)	※	※外国語(英語)	※外国語(英語)	※
5校時	○	○	○	○	○
6校時	○	○外国語(英語)		○	○

○:各教科等(45分) ※:モジュール(15分)  
 ・標準授業時数には含まれないが、児童会活動やクラブ活動について、年間、学期ごと、月ごとなどに適切な授業時数を充てるものとされている。  
 ・モジュールでは、聞き取りや発音の練習など、45分授業(週2コマ)で学んだ表現等を反復により定着させるための活動が適している。

注 7) 奈良女子大学附属小学校における英語教育の実践例は以下の文献に詳しい。尾上利美:「英語を通して日本語を知る外国語活動:奈良女子大学附属小学校における実践を例に」、『人間形成と文化:奈良女子大学文学部教育文化情報学講座年報』, 7, pp.243-252 (2009)

注 8) 現行の外国語活動のねらいに「定着」は目指されていない。あくまでも「聞く」「話す」体験的な言語活動それ自体に価値が置かれている<sup>16)</sup> (2014 文科省直山)。

注 9) 文部科学省国立教育政策研究所教育過程研究センター『小学校外国語活動における評価方法の工夫改善のための参考資料』<sup>11)</sup>では文部科学省初等中等教育局長通知において観点別学習状況評価の観点とその趣旨が示され、①コミュニケーションへの関心・意欲・態度、②外国語への慣れ親しみ、③言語や文化に関する気づき、となっている。

### 引用・参考文献

- 1) 岡本夏木:「ことばと人間形成」、『ことばと教育(岩波講座教育の方法4)』, 岩波書店, pp.1-21 (1987)
- 2) I. Kant: über Pädagogik; 尾渡達雄訳:『教育学(カント全集第16巻)』, 理想社, pp.13-98 (1966)
- 3) I. Kant: Die Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft; 飯島宗享・宇都宮芳明訳:『宗教論(カント全集第9巻)』, 理想社, pp.43-47 (1974)
- 4) 文部科学省:「小学校学習指導要領解説 外国語活動編(第4章 外国語活動 第1目標)」, 東京書籍, p.35 (2008)
- 5) 文部科学省:「小学校学習指導要領解説 道徳編」, 東洋館出版社, p.24 (2008)
- 6) 文部科学省:「Hi, friends!2 指導編」, 文部科学省, p.28 (2012)
- 7) キャンベル久美子:「グローバリゼーションのなかの語学教育:文化的多様性と人権尊重の地平」, 『奈良佐保短期大学紀要』, 20, p.77 (2013)
- 8) Pat Hutchins: *Rosie's Walk*, Prentice Hall (1971)
- 9) キャンベル久美子:「グローバリゼーションのなかの語学教育(その2):小学校低・中学年における導入部の外国語教育」, 『奈良佐保短期大学紀要』, 21 (2014)

- 10) I.Kant: Zum ewigen Frieden ; 小倉志祥訳: 「永遠平和のために」, 『歴史哲学論集 (カント全集第13巻)』, 理想社, pp. 211-280 (1988)
- 11) 文部科学省国立教育政策研究所教育課程センター: 『小学校外国語活動における評価方法等の工夫改善のための参考資料』, 教育出版 (2011)
- 12) 稲葉宏雄: 「道徳教育への思索: カントの場合」, 『道徳教育の諸問題』, 福村出版 (1979)
- 13) 藤崎博也: 「音声の韻律的特徴における言語的、パラ言語的、非言語的情報の表出」, 電子情報学会技術研究報告 (1994)
- 14) ドナ・エリクソン: 「国際的観点から見た<声>とパラ言語情報 (心的態度) の表現」, 『岐阜市立短期大学紀要』, 54 (2006)
- 15) 文部科学省『グローバル化に対応した英語教育会実施計画』,  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/12/1342458.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm) (2014.1.14 アクセス)
- 16) 直山木綿子: 基調講演「グローバル人材の育成と英語教育のこれから-小学校英語教育を中心に-」およびパネルディスカッション, シンポジウム「グローバル化時代の教育を考える」 (2014.11.8)
- 17) 高坂正顕: 『カント』, 弘文堂書房, (1939)
- 18) 皇紀夫, 松井春満, 和田修二: 『人間と教育』, ミネルヴァ書房 (1981)
- 19) キャンベル早川久美子: 「小学校における外国語活動の展開: グローバリゼーションのなかの語学教育 (その3)」, 『関西教育学会年報』, 38, pp. 221-225 (2014)
- 20) キャンベル早川久美子: 口頭発表「小学校語学教育と道徳: 自律的良心の育成」, 第66回関西教育学会 (2014)